輪島の海女 なりわい再生へ

ウニの肥料で里海守る

豊かな里海を守るため、輪島の海女たちの活動が山へと広がっている。輪島の海女漁保存振興会のメンバーは17日、能登半島地震や奥能登豪雨で被災した森林をよみがえらせようと、同市三井町でコナラやヤマザクラなどの苗木を植えた。磯焼けの一因となるウニで作った肥料を活用、山と海の環境を守りながら、なりわいの再生を目指す。



植樹に取り組む海女漁保存振興会のメンバー＝輪島市三井町興徳寺

駆除対象を活用 里山づくりへ植樹

三井町の土砂崩れ現場

植樹したのは、三井町興徳寺の土砂崩れの復旧現場。海女たちは、駆除したウニから作った肥料をまいた後、7種類の広葉樹の苗木を植え、土をかぶせた。さらに、木材チップやわらなどで苗木の周囲を覆った。県健康の森キャンプ場周辺では、ドングリなどを拾い集め、来年度以降の植栽に備えた。

同振興会によると、地震や豪雨災害の後、山地から流れ出た土砂が河口に堆積し、モズクが採れなくなった漁場もある。こうした被害を受け、豊かな海を育む藻場を守るには、山の環境を整えることも欠かせないと考えている。

ウニはサザエやアワビの餌となる海藻を食べるため、駆除の対象となり、以前は採った後に廃棄していた。同振興会は昨年から、ウニを原料とした肥料を使った野菜栽培にも取り組み、海の厄介者を資源として生かす取り組みも進めている。

森の再生活動は林野庁が主催し、県や輪島市、県立大、能登森林組合などの関係機関のほか、海女や漁師ら漁業関係者、地元住民ら約80人が参加した。

海女漁保存振興会の門木奈津希会長(45)は「震災と豪雨で大変なことが起きているのを自分の目で見た。山が元通りになれば海も良くなり、私たちのなりわいの再生にもつながる。できることをしたい」と話した。

2026年10月19日　北國新聞